表紙

目次

月夜の誘惑～夜這いエルフの交配計画～（著者 トナカイ）……2
サキュバスの学園（著者 きょも～）……7
谷に沈むアポプトーシス（著者 柊ユーリ）……14
踊り子ソーニャのおもてなし（著者 トナカイ）……20

月夜の誘惑〜夜這いエルフの交配計画〜

著者　トナカイ

美しい満月が広大な樹海を照らしていた。

その一角にそびえる白亜の城。その窓から月光を浴びる男女が一組いた。

男はこの森を訪れた冒険者パーティのリーダー。相手はこの城を、そして森そのものを所有するエルフ族の頂点。女王メルフィーナだった。

新緑色のコートに身を包み、その顔は美貌をうたわれるエルフ族の中でも際立って美しい。美しい月さえ霞むほどに。

小さなテーブルを挟み、グラスを合わせる小さな音が鳴る。

乾杯した男女は琥珀色の液体を一口飲み、彼女はかすかに微笑んだ。

「この国のお酒はいかがですか、勇者様？」

美しい女がそう聞くと男は戸惑った。

「美味しいです。でも、そんな呼び方は要りませんよ、女王陛下」

恐縮している彼に女王メルフィーナは首を振った。

「何を仰いましょうか。あなた様のお噂はいくつも届いております。北の国では邪竜を討伐し、東国では海獣を追い払い、昨日はこの森に現れた魔蟲を斃してくださいました。あなた様こそ英雄。勇者の名にふさわしいのです」

惜しみなく称賛の言葉を送る彼女の目は敬意に満ちている。

だが、夜間に突然コートを羽織って部屋を訪れ、お酒を酌み交わしたいと頼まれた彼には今も疑念があった。女王は一体何をしにやってきたのか。

「あの……」

ついに質問しようとした彼にメルフィーナは奇襲を行った。

立ち上がってコートを脱ぎ去ったのだ。

その下にあったものに彼は石化する。戦場なら命を奪われているだろう。

コートの下にあったのは淫らな下着だった。いや、下着と呼べるかは怪しい。巨大な瓜のような乳房を細い紐がかろうじて支え、同じような紐が腰と股間に食い込んでいる。しかしどちらも秘所を隠す役目を全く果たしていない。彼女の乳房と女性器は丸見えだった。

「……」

絶句する彼の脳内では驚きの波がゆっくりと引いてゆき、淫らな感情がムクムクと生まれていた。

女王の肢体は途方もなく美しかった。月明かりに照らされた極上の肢体は大理石のように白く、腰はハチのようにくびれている。その上にはこぼれそうなほど大きな乳房が備わり、蕾のような小さな乳首がぽつんと浮いている。腰から下には丸みを帯びた尻。そして、てかてかと濡れた輝きを放つのは長い両脚の付け根にある縦の筋。女王の膣口だった。

ごくり、と彼は喉を鳴らした。
エルフ族の頂点に立つ女が惜しげもなく曝け出す性器に目は釘付けになっている。
そこには大人の女が生やすはずの恥毛がまったくない。
「ふふ、そこは剃って参りました」
メルフィーナは心を読んだように言った。
「このような姿はお嫌いでしょうか？ただの裸では退屈と思いましたが」
そう問われて彼は何を言えばいいのかわからない。
石化は今も継続中だった。
「勇者様、ひょっとして私の意図が伝わっておりませんか？」
それに彼はこくりと頷く。
女王はにっこりと微笑み、事情を話し始めた。
「すでにご存じと思いますが、私達、エルフ族は寿命こそ長いですが、子供を生める回数が少ないのです。そのために婚姻する相手は慎重に選び、この方こそ最も優れているという男性の子供しか作りません。私の夫はエルフ族の中でも随一の魔力です……が、勇者様には及びません」
彼女の目には相手の魔力を計る力があった。
その目が彼の凄まじい魔法の才を見抜き、女王としての責務がこう囁いた。
この男の子供を生むべきだ、と。
「率直に申しますと勇者様の子種を頂きたいのです」
「子種……」
「はい。子作りをして頂けますか？」
突拍子もない要望に彼は面食らった。
口からは拒否が出そうになったが、心には正反対の欲望が生まれていた。
「勇者様、一つお詫びしなければなりません」
女王は妖艶な雰囲気を漂わせながら勇者に近づいた。
「先程飲んで頂いたお酒にはエルフ族の秘薬が混ぜてあります。お身体が熱くなってきたのではありませんか？」
そう言われて彼は初めて気が付いた。
体が内側から熱くなり、汗さえかき始めている。そして例えようもない疼きがやってきた。
「これは婚姻した男女が子供を作る際に身体と心を整えるための薬です。そしてこの部屋には魔法で結界を張っており、どれだけ音を立てても外には漏れません。いかがわしい言葉をどれだけ叫ぼうと。ふふふ……」
メルフィーナはそう言って彼の手を取るとすぐ傍のベッドまで誘った。
魅惑の女体と秘薬を飲んだことで彼には抵抗するという発想がなくなり、人形のようにふらふらと歩いてベッドに座らされた。その前には全裸よりも卑猥な姿をした女王がいる。
その視線の先には彼の膨らんだ股間。彼はそこが完全に起立しているのにやっと気づいた。
「あっ」

羞恥心から隠そうとするが、その手を彼女がそっと押さえた。
「何も恥じることはありません。私にお任せください」
一国の女王は使用人のように床に膝をつき、彼のベルトを解いて完全に硬直した男根を外気に晒した。
「まあ、さすが勇者様のお道具ですわ。なんとたくましい」
メルフィーナは称賛を送り、躊躇なくその肉棒を掴んだ。
「ううっ！」
細い指が血管の浮き出た性器を軽く握り、彼の心臓は早鐘のように鳴っていた。
「熱いですわ。勇者様をこんな風にした責任を取らせてくださいませ」
彼女はそう言うと丸出しに近い大きな乳房で肉棒を挟み込んだ。
「あ、あぁ……」
生暖かい感触が陰茎を包み、勇者の興奮と快感をぐんぐんと引き上げてゆく。

重そうな乳房は彼の膝の上に乗せられ、谷間からは亀頭がにょきっと突き出ている。
「勇者様、時間はたっぷりとあります。まずはこのような行為から」
彼女は両手で胸を左右から押さえ、陰茎を圧迫しながら上下に擦り始めた。
エルフの女王が胸で男根をしごいているのだ。昼間、彼らが謁見した際に威厳と誇りに満ちていた彼女が今は娼婦のように破廉恥な行為をしている。その特別感と優越感は秘薬の効果と相まって彼を楽園に誘ってゆく。
「はあ……はあ……」

荒く息遣いをする彼に女王メルフィーナは胸を使って奉仕し、鈴口をじっと見つめた。
そこからは透明な先走り液がすぐに溢れ、彼女の胸を汚していく。あっという間に彼の男根と女王の胸は先走り液にまみれてしまった。
「うふふ、よく滑るようになって参りましたわ」
女王はその液体を潤滑油にしてさらに胸でしごいてゆく。
ずりゅっずりゅっと柔らかいものがこすれる音がいくらか続き、やがて次の衝撃が彼を襲った。
「勇者様をお口でも慰めさせて頂きます」
「え……あっ！」
彼女は口を広げて舌を出し、その上に勇者の亀頭を乗せた。女王の口に性器を触れさせたのだ。しかもそのまま口を前に出してゆき、勇者の男根を口の中へ挿入してゆくではないか。
男根を奥まで迎え入れると唇を閉じ、見えなくなった内側では彼女の舌がゆっくりと亀頭をしゃぶりはじめた。
「ちゅぱっ、ちゅるっ、ぺろっ、ぺろろっ」
「うっ！」
女王の舌はカリ首の部分を嘗め回した。
乳房とその感触を同時に味わうと勇者の中に究極の世界という言葉が浮かんだ。決して大げさではなく、これまで味わったどんな快楽よりも強く濃密だった。
「れろっれろっ、ちゅるっ、ぺろろろぉぉっ……」
メルフィーナは嫌がる風など少しもなく、好きな飴玉を舐めるように勇者の男根に舌で奉仕してゆく。その目が上目遣いになって勇者の顔を見た。一国の女王が男根を咥えながら見上げる姿に彼は後ろめたい喜びを覚えた。
「ちゅぱっちゅぱっ、べろべろっ、じゅっ、じゅるるるっ」
部屋の中に粘っこい水音が鳴り続け、彼女の口の奉仕は徐々に激しさを増していった。
メルフィーナは上半身を上下に動かすことで乳房と唇を男根に擦りつけ、舌は巧みに勇者の敏感な部分を責め立ててゆく。その感触を味わいながら女王の乳房がぶるんぶるんと揺れて小さな乳首が踊る様を見ることで勇者にはすぐに限界がやってきた。
「く、ううぅっ！」
男根の根元に熱いマグマのような粘液が集まり、塞がった水門はめりめりと音を立てて決壊する寸前だ。その隙間からは先走り汁がだらだらとヨダレのように漏れ続けて女王の口内を汚してゆく。
彼女は湧き出る泉のようなそれを躊躇いもせず飲んだ。
「ごくっごくっ、べろっべろろっ、ごきゅっごきゅっ、ン、ンゥゥゥッ……」
女王が淫らな呻き声をあげながら口の端を少し上げた。笑ったのだ。
美味しいですわ。でも、別の液体も飲ませてくださいませ。
勇者は女王がそう思っていると確信した。
「じゅるるっ……勇者しゃまぁ……このまま……べろっれろろっ……わたひの口へお出しくらはい……べろっべろろろぉぉぉっ」

男根を愛撫しながら女王は口内での放出をねだった。
月さえ羨む美貌を持つ女の口に精液を注ぎ込んで汚す。この世のどんな男も逆らえない誘惑に負け、彼は煮えたぎる欲望を解放した。
「くっ！ううっ！で、出るぅぅぅっ！」
「ンゥゥゥッッッ！！」
男根の先端から熱い白濁液がどびゅうううううっと放出された。
脈打ちながら出る粘液はメルフィーナの舌に、歯に、歯茎にびちゃびちゃと振りかかり、その間も彼女の愛撫は止まらない。舌は精液にまみれながら男根の裏筋を嘗め回し、唇と乳房を激しく往復させて陰茎をしごき続ける。びゅーびゅーと永遠に続くかのような射精が彼女の口内を満たし、やがてゴクッゴクッとくぐもった音を慣らしながら喉が動いた。エルフの女王は彼の精液を飲んでいた。
「ン、ンゥゥゥッ……」
不快な顔など一切せず、それどころか愉悦に満ちた顔でメルフィーナは子種を飲み続ける。
長い長い射精が終わると女王の口は「じゅぽっ」と音を立てて男根から離れた。様々な液体の混ざったものが糸を引き、その唇はにこりと笑った。
「ふふ、楽しんで頂けたようですわね」
「女王陛下……」
まさか飲むとは思わず、どんな言葉を返せばいいかわからない彼は途方に暮れた。
メルフィーナは視線を彼の顔から男根に戻す。少しも萎えていない。
「さすが我が国の秘薬。たった一度では効果が切れませんわね。ぺろっ」
「あうっ！」
油断している所で女王が再び男根を舐め、彼は奇妙な声が出た。
「勇者様の大切なお道具をお掃除いたしますわ」
彼女はそう言うと舌を動かし、陰茎やカリ首などに残った精液を隅々まで舐めとった。
「れろっれろろっ……このくらいでよろしいでしょうか」
メルフィーナは月光を浴びてキラキラと光る濡れた男根を眺めて満足し、テーブルの上にあった自分のグラスを呷った。秘薬を混ぜたという美酒が先程の精液と同じようにゴクゴクと嚥下され、最後まで飲み干した唇を舌がちろりと舐める。
「さあ、勇者様、今度こそ私の望みを叶えて頂けますか？」
「今度こそ……」
彼の視線は女王の顔から下半身へ移った。

※続きは製品版で読めます。

サキュバスの学園

著者 きょも〜

私立聖アイリス女学院。
某県にあるその女子校はご存じだろうか？
この学校は、閉鎖的で外部からは中の様子をうかがい知れない。
実際僕も、教師として採用されるまでは名前も聞いたことがなかった。
なんでも、決められた血筋の人間、限られた能力を持った人間しか中に入れていないらしい。
教師の募集も全くしていなかったのだから、僕のような凡庸な人間が、教師として雇用されるのは、奇跡に近かったかもしれない。

朝のホームルームを前に、僕は職員室でクロユリ先生とクラスについての打ち合わせをしていた。
クロユリ先生は、今回担当するクラスに副担任としてついてくれる先生だ。
ベテランというので、大分年上かとも思ったが二〇代にしか見えない。
先生はどこか妖艶な雰囲気で、僕は思わず緊張していた。
「え？ 今、なんて？ サキュバス、ですか？」
「そうよ。先生以外の全員。生徒も先生もみんなサキュバスなの」
クロユリ先生はいたずらっぽく笑って言った。
サキュバスと言えば淫魔だろうか。
ファンタジーでしか聞いたことのない単語に、僕は困惑する。
記憶に間違いが無ければ、サキュバスとは性的に男性を誘惑する悪魔だ。
誘惑するようにひらいたクロユリ先生の胸元に、僕は思わず息をのむ。
「じょ、冗談か何かですか？」
「生徒たちは、きっとあなたを誘惑してくるわ。あなたがそそのかされないように、ホームルームの前に軽くヌイておきましょうか♡」
「く、クロユリ先生っ？ 何を――」
身構える暇も無く、クロユリ先生は、当然のように僕のズボンのファスナーを下ろした。

既に大きくなった僕のもの下着から取り出し、クロユリ先生は妖しく笑う。
「……ふふ♡ な～んだ、もうおっきくなってるじゃない♡ サキュバスって聞いて期待しちゃった？」
「そ、そんなことは」
「いいのよ♡ 男の人なんだから、仕方ないわ」
クロユリ先生の温かい手の平が勃起をつつむ。
ビクンと震えた僕自身に、クロユリ先生はおかしそうに笑った。
「ふふ♡ ……かちかち♡」
耳元でクロユリ先生がささやいた。
くすぐったい感触に身体が震える。
柔らかく勃起を握った手が、ゆっくり上下し始める。
「……いっぱい溜まってそう♡ んっ……♡」
耳でクロユリ先生の熱い吐息を感じた。
ゾクゾクとする感触。
反射的に身をよじった僕を、クロユリ先生は身体を密着させ抱きしめる。
「逃げちゃだめよ……♡ いっぱい出して、生徒達の誘惑に負けないようにしましょうね♡」
勃起をつつむ手が、僕をもてあそぶように早さを変える。
耳に生温かい感触。
クロユリ先生の舌だ。
「ちゅるっ……♡ ちゅるる♡」
クロユリ先生の舌がみぞに沿うように、ゆっくりとうごく。
ちゅこ、ちゅこ、ちゅこ。
いつの間にか、規則的に動くクロユリ先生の手は水音を帯びている。
射精の感覚が近づいてくる。
「クロユリ先生っ……」
「ふふふっ♡ いいのよ。そのまま射精して♡」
勃起をしごく手のスピードが上がった。
待ち構えるように、もう片方の手が膨らんだ勃起の前にそえられる。
どぴゅっ♡ ぴゅるる♡ ぴゅくっ♡ ぴゅるるっ♡
クロユリ先生の手の温かい体温に包まれたまま、射精が始まる。
手の動きはゆっくりと止まり、漏れだす白濁をこぼれないように受け止めた。
ぴゅくっ♡ ぴゅるるっ♡ ぴゅくっ♡
射精を続ける勃起を、しぼるようにクロユリ先生の手が上下する。
くすぐったさに声を上げる僕を、クロユリ先生はおかしそうに笑った。
「ふふっ……♡ やっぱり濃い♡」

手の中にたまった白濁液を、クロユリ先生は美味しそうにすする。
「生徒に誘惑されたら大変だから……♡ おちんちん、大きくなっちゃったら抜いてあげるから、いつでも私に言ってね♡」
「は……はい」
クロユリ先生は妖艶に笑う。
サキュバス……誘惑。
今日からの学園生活は一体どんな物になるのか、
僕は一抹の不安と、一抹の期待を胸に教室へ向かった。

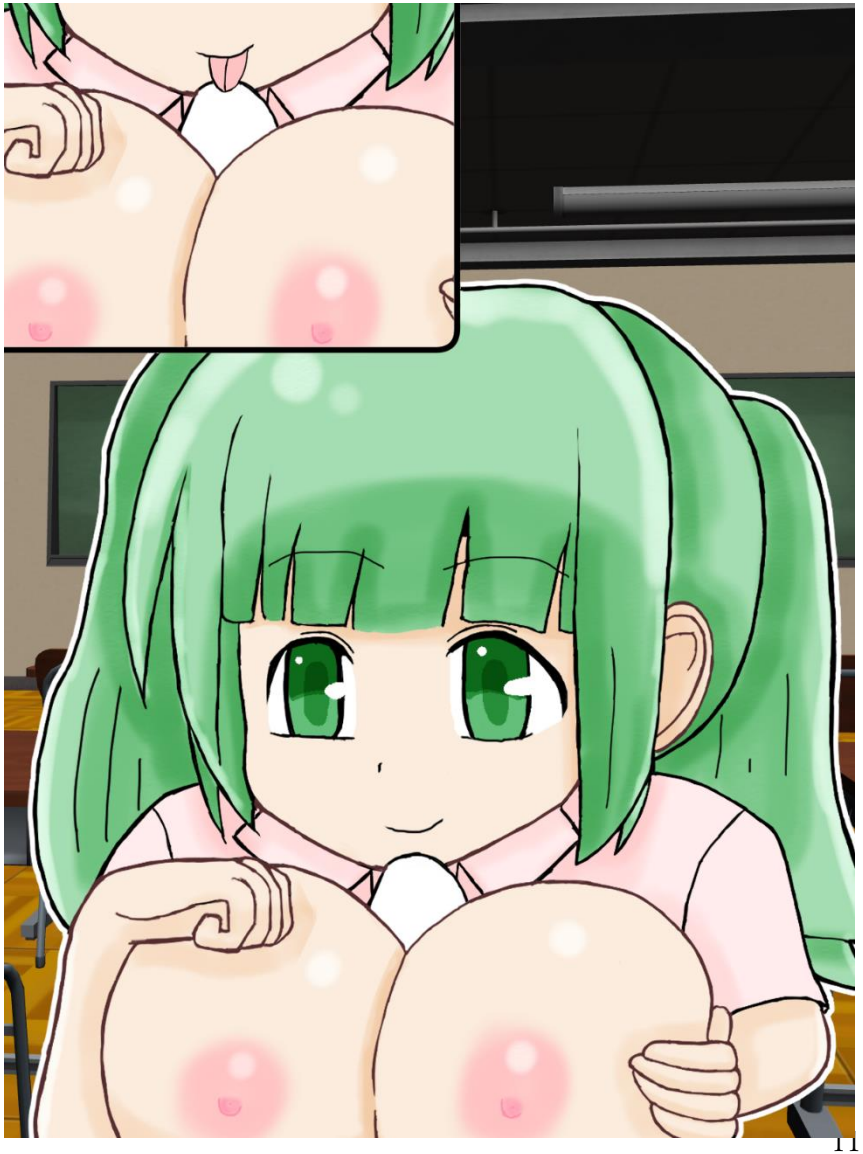
朝のホームルームで黒板に名前を書き、僕は新担任として軽く自己紹介する。
パラパラと拍手がわく。
クラスは特に変わった印象をうけなかった。
クロユリ先生から出た、サキュバスという単語が冗談だったかの様だ。
もしかしたらからかわれたのかもしれない。
僕は既にそう思い始めていた。
長めのホームルームが終わると、直ぐに一限目が始まる。
ちょうど、一限目は僕の担当授業、生物だ。
授業の内容は、直前になってクロユリ先生から指示されていた。
そのクロユリ先生は教室の後ろで僕の授業をニコニコと見守ってくれている。
「それじゃあ、みんな教科書を広げて。……三一四ページだね」
僕の言葉に反応し、生徒達が一斉に教科書のページをめくりはじめる。
項目は、生殖だ。
分かってはいたが、女子校で、しかも一回目からだと気まずい内容だ。
僕は照れ隠しするように、努めて明るい声で授業を始める。
「ということで、え～……今日は動物の生殖について授業します」
教室からはクスクスと笑い声が上がる。
赴任していきなりだから、分からないこともない。
偶然なんだろうが、不運を感じる。
「笑わないで。生殖は生物として子孫を残すのに必要な事で、恥ずかしい事じゃないよ。じゃあまず図一の解説から――」
振り返り、黒板に板書しながら、僕は授業を始めた。
その後、授業は円滑に進み二〇分程がたった。
「――と言うことで、受精卵から成体になるまでのプロセスを発生と言います」
板書を終え、ノートをとる生徒達を待つ。
僕はその間に、生徒達の合間を歩き、様子を見ていた。

ちょうど、一人の生徒と目が合った。
見上げる表情はどこか無邪気で周りの生徒より幼くも見える。
確か、名前はホムラだ。
どこかあどけない顔に似合わず、胸はかなり大きい。
制服のブラウスボタンははち切れそうで、見ていて不安になる。
つい見入ってしまい、咳払いして僕は目をそらした。
「先生、先生！ ここの……これについて知りたいんですが」
「ん、何かな？」
ホムラの指さした教科書に書かれた単語を覗く。

『射精』

見間違いでもなく、ホムラはその単語を指さしていた。
からかわれたのか。不意をつかれ、僕は動揺する。
しかし、ホムラの無邪気な表情を見る限り、単純な好奇心からの発言にも聞こえた。
「ボク、射精って見たことなくって！ 先生の射精、見せて欲しいです！」
「えっ……？ いや……」
急なホムラの要求に、僕はドギマギして返答に困る。
赤面した僕に追い打ちをかけるように、ホムラは続ける。
「恥ずかしいですか？ でも先生、生殖は必要な事だから恥ずかしくないって言ってたじゃないですか」
「あ、ああ……そうなんだけど。射精っていうのは、えっと――」
自分でも情けないとは思うが、後ろで見ていたクロユリ先生に僕は助けを求める視線を送る。
クロユリ先生は、僕の視線に気がつくと、にっこり笑って口を開いた。
「まあ！ ちょうどいいんじゃないかしら♡ ちょうど先生が男の方なんだし、見せて貰いましょうか♡」
「えっ……――」
「やった～！」
何を言っているんですかクロユリ先生――！
抗議の視線を送る僕のズボンのファスナーが軽快な音をたてて落ちていく。
「先生、どんなおちんちんしてるんだろう♡」
「えっ――ちょ！」
気づいて視線を戻したときには、時既に遅かった。
ホムラは下着の中のものをひっぱり出し、身を乗り出して観察している。
周りの生徒から控えめな歓声と黄色い悲鳴があがった。
クロユリ先生は、そんな様子をニコニコと見守っている。

サキュバス。
先ほどの言葉の意味を、今更僕は考えていた。
「まず勃起させればいいんですよね♡」
ホムラの温かい両手が僕のそれをつつむ。
若い、柔らかい手の感触。
それだけで、僕のそれは意思に反して頭をもたげていった。
「わぁ……すごい♡ 手の中でムクムクムク～って成長しました♡」
言いながらぎこちないホムラの手つきが僕を刺激する。
ちゅくちゅくと音がたちはじめる。
「気持ちいいですか？」
「……うん」
「えへへ♡ よかった♡」
僕の言葉に、ホムラは嬉しそうに微笑む。
顔だけ見ていれば、本当に子供のような表情だ。
「……じゃあじゃあ、も～っとボクが気持ちよくしてあげますね♡」
ホムラがブラウスのボタンを外す。
大きなブラにつつまれた、たわわな胸がたゆんと外気にふれる。



「おっぱいでしてあげます♡ 先生、ず～っと私の胸見てたでしょ♡」
「いや……それはっ……」
言い訳をする僕を無視して、ホムラはブラのホックを外した。
ぽろりと大きなカップが乳房からはがれる。
綺麗なピンク色の乳首があらわになる。
頭がクラクラしてくるのを感じる。
「……よいしょっと♡ ふふっ♡」
ゆっくりと、柔らかいホムラの体温が僕をつつんでいく。
深いところに勃起が入ると、トクトクとうつホムラの鼓動を感じた気がした。
ホムラはゆっくりと、揉むように胸を動かして勃起を刺激する。
「どうですか？ 気持ちいいですか？」
「……うん」
柔らかい乳房が隙間なくみっちりと勃起をつつむ。
ホムラの体温と、汗ばんだ肌がこきざみにゆれる。
「んっ……ちゅぷっ♡」
胸の谷間に、ホムラがみずからの唾を落とした
くちゅくちゅと音を立てながら、唾は勃起に塗り込まれる様に谷間に消えていく。
ちゅりゅっ ちゅりゅっ ちゅりゅっ
時間が止まったように静まりかえった教室に場違いな音が響く。
「ふふ♡ おっぱいの中からおちんちん出てくる♡」
ホムラが胸から飛び出した先端を見つめる。
熱い吐息がかかる。
僕は期待に息をのんだ。
「舐めちゃお♡ れぇ……♡」
ホムラの舌の先端が亀頭に触れる。
ゾクゾクと快感がこみ上げる。
荒くなった呼吸をなだめようとするが上手くいかない。
「気持ちいいんだ♡ ……はむっ♡」
ホムラが先端を飲み込んだ。
口の中は、胸の中より温かい。
なめらかな舌が、チロチロと先端を刺激する。
「ふふっ♡ ちゅぷ♡ れろろっ♡ 先生、良いよ♡」
「……なにが……♡」
「出して、良いよ♡」

大きな胸が上下して射精を促す。
舌先がチロチロと亀頭をくすぐる。
「ホムラっ」
「ちゅぱっ♡ ふふふふ♡ んっ♡ れろろろ♡」
僕が息を乱すたびにホムラの攻めは苛烈になっていく。
唾をふくんだ乳房がにちゅ、にちゅ、と音を立てる。
にじんだカウパーが、その先から舐めとられていく。
ホムラが深く勃起をくわえ込む。
ぶぴゅっ♡ びゅるる♡ びゅくっ♡ びゅっ♡
一瞬ビクッと反応したホムラはそのまま喉をならし始めた。
飲んでいる。
口内に出された精液を、そのまま飲み干している。
びゅるっ♡ ぴゅっ♡ ぴゅくっ♡
「んっ♡ んくっ♡ ちゅるる♡」
尿道に残った精液が吸い出される。
背筋に走ったあまりの快感に、僕はふらついて後ろの机に手をついて耐えた。
「ちゅるっ♡ ごちそうさまでした♡ 先生の精液、おいしかったです……♡」
にっこりとホムラは笑う。
我に返ると、教室の中心で、僕は性器を丸出しにして突っ立っていた。
慌てて僕は、射精を終えてしなびたものをしまった。
「はいっ、こうして男の人は射精します♡ ホムラちゃんの言ったように私たちサキュバスにとってはとっても美味しいものみたいですね♡」
クロユリ先生が総括する。
ちょうど、かぶせるようにチャイムが鳴った。
「先生、私もお射精させてみたいです！」
「あ、ずるい！ 先生、私が先ね！」
女子達がわらわらと僕の周りに集まってくる。
「先生もつかれちゃうから。ほどほどにしてあげてね♡」
クロユリ先生のつぶやいた言葉は、彼女たちには聞こえていないようだった。
ファスナーが下ろされる。
助けを求めようとしたクロユリ先生は、既に教室を出ていた。

※続きは製品版で読めます。

「ぜぇ……はぁ……遠いな、畜生……」

その谷の向こうには、ハーピーの住む村があると言われていた。

ハーピーには女性しかいない。男がいない。

それなのに、村を形成しているということは、なんらかのかたちで子孫を作っているということでもある。

だったら、男の種はどこから調達しているのか？

下世話な男たちの酒場での会話では、時にそんな話で盛り上がることがあった。

「待ってろよォ……俺の金ぇ……！」

そして今、無精ひげを顔にたくわえて人相の悪い男が、そちらに向かってひとり歩みをすすめている。

人里のある街からここまで、三日三晩歩き通してきた。街を出る前に借金までこさえて馴染みの娼婦・ニアを一晩中抱いてきてはいる。胸も小さく色気も少ない、あばたの多い女だがその分安く、客もなかなかつかないようでサービス旺盛なのがよかった。それにアルバートに惚れているフシがあって、更に少し安く抱けることもあるのだ。

アルバートの変わった様子を察知したのか、珍しく全身で密着し、抱き着いてくるような仕草で中出しを乞うてきたのは少し愛らしいと思えた。

だが、その場限りだ。

そうして空っぽになった精巣は、今また三日の旅路でパンパンだ。

「抱いて抱いて抱きつぶしてェ……気にいらねぇのは売り飛ばしてやるからなァ……！」

ハーピーの里はこの旅路の向こうにあるはずだ。その情報は正確なものだと根拠は薄いがアルバートは確信していた。

ハーピーは人間の手によって乱獲され、今や絶滅危惧種に近いと聞く。

彼女たちは見目麗しく、露出の高い服を好んでしかも性欲が旺盛だ。同種にいないせいか人間の男とあらばすぐに恋をして、ふらふらとついていってしまう。そのせいで彼女たちはすぐに囚われ、人間の裕福な男たちの間で売り買いが頻繁となったのだ。

だがそれも、彼女たちの好みにあった男の場合のみだと聞くが、そんなことは今のアルバートには関係がなかった。

なにせ、アルバートは下品で女好きで酒好きで、だらしない男ではあるが、弓の名人であることもまた確かなのだ。

「ははん」

想像するだけで、彼の性器は既にぶるぶると昂っている。

あと一日も歩けば、ハーピーの谷が見えてくるだろう……そんなアルバートの願望は、膨らむ一方だった。

谷に沈むアポプトーシス

著者 柊ユーリ

「こんにちはぁ」

「ふぅぁっ！？」

谷を越える直前で、アルバートは焚火を焚いて休みをとった……はずだった。

人間や獣が入るのを遮るため、ハーピーの谷はさすがの難所だ、ひとつ上り下りするだけで息が上がってしまう。だからアルバートは最後の難所を前に休息をとることにした。

しかし……。

「あなたはオジサン？　オニィサン？」

「お、俺はまだぎりぎり二〇代だ！　それにアルバートという名前が……むぐぅっ！？」

「じゃあお兄さんにしとこうか。うん、あたしちょっとお腹が空いてたんだよね」

目覚めたすぐ顔の前に、覗き込む緑の髪の少女があった。

年のころは十代後半か、二十代前半か。あどけない大きな瞳をくりくりとさせて、慌てて起き上がったアルバートの前に惜しげもなく晒される、すらりと伸びた健康的な手足が眩しい。

かと思えば、すぐさま唇を塞がれてアルバートは目を丸くするほかない。たちまち薄い舌が差し込まれて、口内を蹂躙された。

「はぁ、んっ……んふふ……んぅ……」

意味が分からない。確かにハーピーを犯すため、金にするためここにきたが、何故ハーピーからキスを送られるのか。

そう、彼女は確かにハーピーだ。背中からはさらりと長く束ねられた新緑の髪と同じ色をしたな羽がちょこんと顔を出しているのがなによりの証だ。

アルバートは何故か抗えない。そして、なにかを喉の奥に送り込まれて、思わずごくんとそれを飲み込んでいた。

「なっ、なんだ、げほっ……」

なんだ、と思ったときには既にハーピーの少女は身体を離して距離をとっている。

アルバートはといえば、再びその場所に手をついて身体が崩れ落ちそうになるのを堪えた。

頭がぐらりと揺れる。何かを飲まされたというのはわかった。だがもう吐き出せそうにない。とっくに喉の奥でそれは溶けて、身体にしみこむような感覚がある。

「ふふっ、お兄さんちょろいね」

「ちょろ……げほっ、げふっ……！ くそ、何を飲ませた……！」

「ちょっとした薬だよ。大丈夫、命に別状はないから」

命はね、と意味ありげに念押しし、ハーピーはつんと指で押してアルバートの身体をそこに横たえさせた。

身体に力の入らないアルバートはそれに従うしかない。けれど、身体は素直だ。ハーピー特有ののきめ細やかな肌、美しく整った目鼻立ち、そして豊満な胸と新緑の香りがアルバートの視界いっぱいに広がって、むくむくと男を滾らせてしまう。

「お、お前は……」

「あたし？ あたしはアテナ。お兄さん、あたしの里を探してたんでしょ？んふふ」

子供のように、なにもかもを見透かしたように少女はくすくすと笑い、アルバートの身体に跨った。

ぺろりと出した舌で唇を舐め、まるで食事の前の子供のようなあどけなさで見下ろしてくる。

ゆるく着ていた白いシャツをあっさりとめくりあげられ、小さな手がそこを無遠慮に這った。

「ちょっと、なにっ……！？」

「望み通りのことしてあげるって言ってんの。あたしとセックスしたいんでしょ？ あたしもちょうどセックスしたかったんだよね……んっ……」

「くぅぁっ……！？」

何故だか身体が思うように動かない。ついさっき、なにか飲まされたせいなのか。

びりびりと電気が身体中を覆うような感覚。そして少女は遠慮なく、身体を前倒しにしてべろりと腹の筋肉を舌を出して舐めた。

「は、はっ、はっ……くぁっ……あ、ぁっ……！」

アルバートは本来女を責めて責めて責め立てて女を翻弄することで自身の力に、魅力に満足をするセックスをするタイプだ。

奉仕などはほとんどさせない。だいたい、商売女でもそうフェラチオの上手い女には当たってこなかった。馴染みのニアだってそうだ。

それが今、年端もいかないような見かけの少女にいいようにされて、かつてないほど興奮している自分を感じる。

少女はいつのまにか、ちゅう、ちゅっ、ちゅるちゅると音を立てて少女が乳首を責め立て吸い上げてきた。

「っくそ、キモチイイじゃねぇか、くそっ……」

「あはっ、憎まれ口でもかぁいい声。みっともない声。ふふっ、お兄さんったら一人でここまで来るだけあって、筋肉だけは立派なんだから」

もう片方の乳首はぴんと摘まみあげられて、くりくりと擦られる。

アルバートは荒い息を絶え間なく零した。さっき飲まされた薬に媚薬も入っていたのかもしれない。

趣味ではないはずの少女の責め立ては、驚くほどびりびりと身体中を刺激して

「なぁヤりてぇんだろ、俺のをしゃぶれよ、俺もてめぇのマンコなめつくし、たらァ……ッ」

「んん〜？ どうしようかなぁ……お兄さん、元気だねぇ」

覗き込むように、見せつけるように舌で舐られ、もう片方をかりかりと乳首を爪先で責め立てられて、身体がびくびくと揺れる。

たまらなく気持ちいいことは、もはや否定できない。だが、このままではとてもではないがいられないのだ。

アルバートは自慢のペニスを見せつけるように腰を揺らす。腹のあたりにそれが触れていることがわかった少女が、にんまりとした顔をした。

「立派なおちんぽぉ。カリも大きくて、ぶっとくて、長くてぇ……」

「だろう？ ほれ、はやくしゃぶってくれや」

「んっふ、いいよぉ〜」

ふわりと飛び上がって、体勢を入れ替える。薄いショーツに布が引っ掛けてあるような薄い布を剥ぎ取れば、すぐそこには女性器があらわになった。

アルバートが重い手をどうにか動かし、そこに触れる。ぬるりとそこは湿り気を帯びていて、にやりとアルバートは笑みを深めた。

「どっろどろじゃねぇか、なぁ。欲しかったんだろ、淫乱ハーピー」

「んっ、欲しかったぁ、ちんぽごりごりしたくてぇ……んふふふ……」

眼前に下りてくる柔らかな尻を鷲掴みにし、べろりと入口を舐め上げた。

ぴくん、ぴくんと震える様は人間の娘となんら変わらない。責め立てられて喘ぎイく馴染みの娼婦を思い出し、それを繰り返すべくふうっとそこに息を吹きかけた。

「ひゃうっ！」

「おら、この淫乱マンコの持ち主の名前聞かせろや。ええ？」

「ええ〜？ セックス大好きなのはハーピーみんなだよぉ？ いいけどぉ……どうせ、すぐに忘れちゃうし」

「ん？ なにか言ったか？」

「ううん〜。あたしはねぇ、ニアだよぉ」

「ほう」

まさかあの馴染みの娼婦と同じ名前だとは。

意気込んだアルバートはろくに返事もせず、そこを責め立て始めた。

絶え間なく顔に落ちてくるニアの愛液をすすり、クリトリスをつついた。やわらかなひだが頬に触れてこちらを煽ることこのうえない。

「ぁあんっ！ お兄さん上手ぅ、そこ、もっと吸ってぇ……！」

「んっ、んぐっ！ んむむっ！」

とうとう顔に押し付けるようにニアのマンコ全体がべったりと顔に覆いかぶさってくる。

息も絶え絶えだったが、それでも意地でアルバートは舌を繰り出した。気づけばニアは起き上がっていて、顔面騎乗位の格好だ。

アルバートのペニスには触れられもおらず、それは寂し気にひくひくと宙を仰いでいるが、アルバートはそれを気にする余裕もない。

尻を揉み、一刻も早くニアをイかせるべくクリトリスを押しつぶし、中を細くすぼませた舌ですすりあげる。

「っぁ、ああっ！　イく、イくイくイくぅ、ぁんっ！　お兄さんの舌で犯されてイくぅぁあああああっ！」

ひときわ腰を大きく跳ねさせたニアが、絶頂と共に最後に多くの愛液を溢れ出させた。

鼻にまで入り込んできたそれのせいで、今度こそ息ができなくなる。目を見開き悶えたが、ニアが満足するまでそれはびくとも動かなかった。

ずっしりと重たい尻がアルバートの上からどかされるまで、酸欠に喘ぐ。だが構わず、やがてのっそりと満足したニアは腰をあげた。

「……あはぁ、お兄さんのパンツ、もうぐっしょぐしょじゃん。触ってもないのに、イっちゃったんだぁ？」

言われて、目だけ見開いて視線を下半身へとやる。そんなことがあるわけがない。

絶頂したのに、精液を吐きだしたのに、気づかないがなんてこと、そんなわけがあるはずが。

だが、確かに視線の先でアルバートのペニスは下着の中で精をまき散らしているのがじわじわと沁みてくる。

「うそだろ……」

「そんなにニアちゃんのマンコ、ご奉仕して気持ちよかったぁ？」

ご奉仕、などと。

だが結果的には触れられてもおらず暴発したそこは、ニアの言う通りだと言っているかのようだ。

ニアは今度こそ身体を折りたたみ、アルバートのズボンを下着ごとずらしてアルバートのペニスを窮屈さから解放させる。

あっ！と短くアルバートは喘いだ。

「いただきまぁす」

まだ食うのか！と言いかけたが実際はこれがはじめてだ。

舌なめずりまでして味わうようなその仕草に、光景に、自分の姿も忘れて思わず息を呑む。

視線の先で、ゆっくりとそそり立つペニスがニアの小さな口内におさめられていった。

「んっ、んちゅっ、んんんんっ！　んぼっ、んっ、ふぅぅっ……！」

喉奥まで導かれて、ハーピーの口の生暖かさに包まれる。一度イっているせいか、最初からハイペースな口淫だ。

吸い上げられて、身体が動かない。いや身体が動かないのはやはり先程の飲まされたなにかのせいなのか。

気づけば喘ぐ暇もないうちに、二度目を吐き出されている。ニアはくちゅくちゅと口内で味わうようにして、やがてごくりとそれを飲み込んだ。

「やぁっぱり、濃くて美味しぃ……」

うっとりとするニアの艶めかしさに思わず見惚れる。今すぐ押し倒したい、その、今にも零れ落ちそうな豊かな乳房にむしゃぶりつきたい。

だが、さっきまで動いていたはずの腕すら動かなくなっている。疲労ではない。腕一本動かせないなど、もはやただごとではない。

しかしこちらに構わず、三度目の射精を即すため、ニアはあーんと口を開いていた。
「やっ、やめろぉっ！ オレのッ！ オレのちんこ、吸うな、ふぅぁあああっ！」
「ジョーダンでしょ？ こんな潤沢なおちんぽザーメン、根こそぎ吸い尽くさないと損しちゃう……んふっ」
ニアは阻止する声にも構わず、再びじゅぶりと音をたててそれを咥えた。
抵抗しようにも身体は動かず、責め立ては的確に弱いところを突いてくる。
舌でうっとりと時折カリの周囲をを一巡させ、裏筋を強く吸い上げ。そして喉奥にぐっと押し込んで、その締め付けがすさまじい。
結局、いくらもたたずにアルバートは三度目の絶頂を迎えていた。
「あはぁ、美味しぃ……。どろどろのザーメンが喉にへばりつくの、だぁいっすき……」
うっとりと白濁を飲み干すハーピー、いやニアを見上げて、アルバートは喉を鳴らす。
食われる。本能的にそう思った。女を抱くのではない、抱かれるのでもない。このハーピーに、自分は食われる。
よいしょっと呑気な声をあげて、ニアは着るもの全てを脱ぎ捨てている。ぷるんと豊満な胸が零れ落ち、アルバートの目の前で揺れた。
「どう？ あたしのおっぱい、おっきいでしょ？ うずもれてみたいでしょ？ 食べてみたいでしょ？ んふふふふ」
既に舌が回りづらくなってきていた。
こくこくと何度も頷き、舌先を口外へと伸ばす。ゆっくりとニアの乳房が眼前に来て、限界までさらに伸ばした。
けれど霞めるようにすぐそれは過ぎ去ってしまう。乳首の先端に、ちょいとだけ触れられただろうか。それだけで舌先がびりびりと痺れるような刺激が来た。

※続きは製品版で読めます。

踊り子ソーニャのおもてなし

著者　トナカイ

花火がいくつも上がった。

色とりどりの輝きが日の沈んだ空を照らし、市民の熱気と歓声が夜の街を温めている。

この街を苦しめてきた魔物デスワームが討伐されたことで催された祭りだった。魔物は全長四メートル近い大型で、その死体は広場で見世物となって子供たちが度胸試しをする恰好の対象となっていた。

「いやあ、あんな魔物を倒せる奴がいるなんてな」

火トカゲの干物を肴に酒を飲む男が言った。

「ああ。聞いたか？たった四人の冒険者達らしいぞ」

「すげえ奴らがいたもんだ」

男たちは酒臭い息を吐きながら魔物を討伐してくれたという四人の冒険者パーティを褒め称えた。

その声を聞いた子供といっていい外見の剣士はちらりとその男たちを見る。

「どんな連中なんだ？」

「よく知らないがリーダーの剣士は凄まじく強いらしい。きっと筋肉まみれの大男だろう」

「俺はトロールくらいの背丈と聞いたぞ」

「ええ？俺はエルフみたいな美形って聞いたんだが？」

その会話を聞き、通り過ぎる男の連れはくすくすと笑った。

「訂正してきましょうか？」

「よしてくださいよ」

冒険者ギルドの職員にからかわれ、苦笑してそう言ったのはマルクという若者だった。腰に剣を差しているが、まだ少年と言っていい身長と容姿だ。

「人は見かけによらないとはあなたのためにあるんでしょうね」

ギルド職員はそう言い、マルクに興味深そうな視線を向ける。

彼が例の魔物を倒した冒険者グループのリーダーだと言われたら聞く者はなんと言うか。たぶん腹を抱えて、面白い冗談だと言うだろう。

しかし、それは事実だ。この職員は先程ギルドで魔物を討伐したマルクたちに賞金を払い、祭りを楽しんでもらうために彼を連れて夜の町へと繰り出したのだ。

「ところで、どこへ向かってるんですか？」

マルクは不思議そうに職員に尋ねた。

祭りの会場からはどんどん離れて言っている。

「ははは。この街で最も楽しい所ですよ。期待しててください」

「は、はあ……」

職員は自信たっぷりにマルクを案内する。

その足が止まったのは煌びやかな建物の入り口だ。看板には大きく「妖精の館」と描かれ、魔法具の照明が周囲をピンク色に染めている。

そこに立っていた水着に薄布を羽織ったような衣装を着た美女が二人へ話しかけた。

「いらっしゃいませー♪」

「冒険者ギルドで予約してたんだが？」

「はい♪お待ちしてました♪」

「あの、ここって……」

「さあ、マルクさん！行きましょう！」

「え？えええ！？」

何かを察知したマルクは及び腰になったが、職員はその腕を引っ張って店へ入ってゆく。そこはこの街一番の高級酒場だった。

妖精の館。そこへ入るなり、マルクとほんのりと漂う高級酒と香水の匂いに包まれた。壁から床まで金銀で装飾された通路を潜り抜けるとまた水着のような衣装に身を包んだ美女たちが彼らを出迎える。

「マルク様、お待ちしておりました♪」

「ようこそ♪妖精の館へ♪」

「私達の街を救って頂きありがとうございます～♪」

色白から色黒、背の高い女から低い女、華奢な女から豊満な女まで街中から美女をかき集めたような室内でマルクは途方に暮れた。彼は女の経験がほとんどなかった。

「マルク様、邪魔者は退散しますので後はゆっくり楽しんでください」

「そ、そんな！？」

職員は踵を返し、すたすたと去ってゆく。

その背中を追いかけようとするマルクだが、美女たちは逃がさなかった。すぐに包囲網を張って彼を誉め倒し、大きく真っ赤なソファーに誘導すると高級な酒と果物、そして魅惑の身体を使って彼を籠絡しにかかった。

「お会いできて光栄です♪」

「噂になっている英雄がこんなに可愛らしい方だなんて思いませんでした♪」

「おいくつなんですか？」

「これ、一番いいお酒なんです♪どうぞ♪」

「フルーツもどうぞ♪あーん、してください♪」

「あ、あのぉ……」

胸の谷間や太ももを惜しげもなく見せつける美女たちに取り囲まれ、マルクはゆで上がったタコのようになる。

美女たちの目は楽しげで艶っぽいが、そこには実は軽い火花が散り合い、誰がこの懐具合最高の男を堕とすかという闘いが始まっていた。

その時、喇叭や太鼓の音が鳴り、異国風の曲が始まった。演奏者は一人も見えないので音を閉じ込める魔法具を使っているのだろう。それを合図にピンク色の照明が前方の舞台を照らし、薄いカーテンの向こうには女のシルエットが浮かび上がる。

「え!?ソーニャさん、今日出てたの?」

一人の女性が驚いた。

「休みだって聞いてたのに!」

「きっと店長が呼び出したんだよ。ちぇーっ」

「あーあ、これで勝ち目なくなっちゃったかなぁ」

美女たちは悲鳴のような感想を口にし合い、マルクは何事かと思った。だが、カーテンが開くとあらゆる疑問や考えが消え、何も考えられなくなった。

そこに現れたのは赤いリボンを頭で揺らし、露出度の高い衣装をまとった金髪の美女だった。他の女性が美女ならその踊り子は女神だろう。長髪を揺らし、突き出た胸と尻の間でくびれた腰はまるで砂時計のような凹凸を描いている。その見事な肢体をくねらせながら曲に合わせて踊りを始めるとマルクの目はさらに吸い込まれてゆく。宝石が入った耳飾りや首飾りもキラキラと輝いているが、彼女自身の美しさと色気の前に大した意味はない。

「あ、あの人は……?」

マルクは踊り子に見惚れたまま聞いた。

「ソーニャちゃんですよ」

「この店でナンバーワンの踊り子です」

「気分が乗ってる時しかお客の前に出ない人なんですよ」

彼女に関する情報をかろうじて脳に留めながらマルクは彼女の踊りに魅了された。肩や腹、太ももなどを露出度では傍にいる美女たちと大差はない。いや、ソーニャよりも露出度が高く、胸の先にある突起や股間の筋がちらちらと見えている美女さえいるが、ソーニャはそれに頼らなくても情欲を強く煽った。

身体を前後に揺らせば金糸のような長髪が揺れ、上下に動けば胸や尻の肉がゆさゆさと揺れて衣装からこぼれ落ちそうになる。そしてサファイヤのような蒼い瞳はちらちらとマルクを捉え、唇が微かに微笑んだだけでマルクは強い性欲を覚えた。

「うっ……」

彼は慌てて自分の股間を押さえる。こんな所でズボンを膨張させるなど情けなすぎると。ソーニャの踊りを見なければいいのだが、光に吸い寄せられる虫のように彼の目は舞台の上から離れなくなっていた。

「はぁ〜ん♪」

ソーニャの口から耳が蕩けるような喘ぎが漏れた。楽器に混ざったその声を聞いたマルクは背筋をくすぐられたようにゾクゾクし、彼女の声をもっと聞きたいと思った。踊りを盛り上げるはずの楽器の音が邪魔と感じるほどに。

「マルク様〜♪私の踊りは楽しんで頂けていますか♪」

舞台の上からそう聞かれ、彼はこくこくと首を縦に振った。

それを見た彼女は唇に浮かべた笑みを深め、くるりと半回転して自分の腰に手を当てると豊満な尻をいやらしく揺すった。蜜蜂が求愛するような動きはどんな男でも魅了するだろう。女遊びの少ないマルクにはあまりに刺激が強かった。

「はあ……はあ……」

マルクは息を荒げ、手で必死に押さえている股間は透明な液体がじんわりと染み出してゆく。

室内に流れる曲は少しテンポの遅いものに変化し、ソーニャは足を大きく広げた。股間に食い込むビキニをマルクに見せつけるようにクイクイと動かす挑発的な踊りだ。上半身も巧みに動かし、マルクの心の中には彼女を押し倒したいという強い衝動が湧きあがった。

「あーあ、ソーニャさんの挑発ダンス始まっちゃった」

「あれで堕ちちゃう人、多いんだよねー」

「マルク様もデレデレしちゃってるし」

「もー、私達も見てくださいよー」

傍にいる水着の美女たちはそう言って胸や尻を強調するが、彼の目はソーニャから離れない。やがて彼女は傍にあった天井と床を貫く一本のポールに近寄って手をかける。

片手でそれを握りながらくるくると回ると金髪とヒラヒラした服の布地が後を追いかける。猫のように愛らしく、それでいて魔女のような妖しい笑みを浮かべ、片足をゆっくりと上げてゆく。膝をまっすぐ伸ばし、股間は九〇度、一二〇度とみるみる開いてゆく。やがて爪先がピンと天井に伸びて彼女は見事なI字開脚を披露した。その股間には緩やかな肉の土手が浮き上がり、うっすらと割れた縦筋がマルクの欲望をさらに煽る。

「すごい……」

ごくりと生唾を飲み込み、彼は股間を強く押さえる。彼女の姿はこのまま見ているだけで達してしまいそうなほど妖艶だった。だが、これで終わりではなかった。

「マルク様ぁ♪こ〜んな事もできるんですよぉ♪」

ソーニャはそう言ってI字開脚をしたまま上半身を反らした。

地面に付く片足に上半身の背中がぴたりと付き、そこらの曲芸師も逃げ出しそうなほど柔らかな肢体を見たマルクは称賛を送りたくなった。しかし上下逆さになったことでソーニャの胸に実った大きな果実は衣装からはみ出そうになっており、その部分に彼の視線は集中していた。

「うふふ♪次はこんなポーズも♪」

ソーニャは両手でポールを握ると地面に着いた片足を浮遊させた。両腕の力だけで身体を持ち上げたのだ。彼女は左右の脚を広げたまま時計の針のようにそれらをゆらゆらと動かす。両脚を揃えて一二時の位置にすると大きなヒップが強調され、左右に広げてゆくと今度は股間の食い込みがマルクの目を楽しませる。

「もっと近くで見てもいいんですよ♪マルク様♪」

彼女は左右に足を広げ、再び一八〇度の開脚を披露しながら言った。

「こっちへどうぞ♪ソーニャの身体をじっくり見てください♪」

「あの、それは……」

マルクは股間がパンパンに膨れて動けなかった。

それを知ってか知らずか、ソーニャは今度はM字開脚になって腰をヘコヘコと動かした。並の男ならこの場で襲い掛かってもおかしくない淫らな光景だ。

「ソーニャ、この街を救ってくださった勇者様に馴れ馴れしいんじゃない？」

「そーよそーよ♪」

「あなたがこっちへ来て踊りなさいよ～♪」

他の美女たちがそう囃し立てると彼女は少し考えた。

「確かにそうね♪」

ソーニャはそう言うと両脚を地面に付け、ポールを手放すと踊りながらマルクと美女たちが囲うテーブルの前にまでやってくる。

「さあ、マルク様♪私の踊りをじっくりとご堪能ください♪」

ソーニャは高級酒と果物が乗ったテーブルに両手を乗せると身体をコウモリの様に倒立させた。器用にグラスや皿を避けて逆立ち歩きをし、マルクの目の前までやってくると両手をテーブルに付けたまま両脚をゆっくりと下ろしてゆく。それはテーブルに触れることなくVの字を作ってマルクの頭の左右で停止している。

見事な身体能力だが、手の届く距離でこんなポーズを見せられたマルクは目のやり場に困るどころではない。ソーニャの胸や股間はもちろん、あらゆる部位に視線を彷徨わせ、途方に暮れていた。

「え……えっと……」

「すごーい♪」

「ソーニャがここまでサービスするなんて初めてじゃない？」

「ふふふ、そうよ♪」

彼女は笑みを浮かべ、依然、両手で体を支えたまま言った。

「威張った男ならどうしようかと思ったけど、こんなに素敵な勇者様なら大歓迎だわ♪私も誠意を込めておもてなししないと♪」

ソーニャはちらりと彼の右隣に座った女性を見た。

意図を察したそちらの女性はマルクから少し離れ、一人分のスペースを開けるとソーニャは身体をぐるんと回転させてソファに着地した。その際に胸が豪快に揺れ、衣装がずれてもう少しで乳首が見えそうになった。

「あ……」

「あら？マルク様、どうかしましたか？」

「い、いいえ……」

胸から目を反らすマルクだが、その体内では性欲という獣が暴れ回っていた。

ソーニャは衣装がずれているのを直す様子はなく、それを指摘する勇気は彼にはない。

「ふふふ♪さあ、マルク様、お酒をどうぞ♪」

ソーニャと反対側に座る女性がそう言い、テーブルに置いてあるボトルを取ると彼のグラスになみなみと酒を注ぐ。

マルクは勧められるままにそれを一気に煽った。

「まあ♪素敵な飲みっぷりだわ♪」

「マルク様、次は私ですよー♪」
「私のお酒も飲んでくださーい♪」
「あ、私もー♪」
「え?ええと……」
美女たちが我も我もとボトルを向け、マルクは弱った。
それを見たソーニャはニヤリと笑い、自分もボトルを取った。
「マルク様、今度はこっちの器で飲んでください♪」
彼女はボトルを傾けると自分の胸の間に高級酒を注ぐ。谷間に溜まった酒の泉をマルクに向けると他の女性たちはやられたという顔になった。
「その手があったか……」
「ソーニャってばずるーい」
「いいなあ♪私、そんなに大きくないし♪」
「ふふーん♪さあ、マルク様♪ぐびぐびと一気に飲んでください♪」
「そ、そんな所のお酒を……飲むなんて……」
卑猥な飲酒プレイにマルクは動揺したが、店が醸す妖艶な雰囲気となにより目の前のソーニャという美女の持つ魔力は断るという選択肢を奪ってゆく。
彼の頭は豊かな乳房が作る谷間に吸い寄せられてゆき、酒の泉に唇が触れた。
「マルク様、もっと近寄って♪ほぉら、こんな風に♪」
「ンゥッ!」
彼女はマルクの背中に手を回し、がっしりと抱き着いて胸の谷間を顔に押し付けた。
柔らかい乳房の感触と酒の味を感じたマルクは一瞬驚いたが、目を閉じてゴクゴクと酒を飲み始めた。飲み干すまで解放されないと悟ったからだ。
「いい飲みっぷりですよ♪マルク様〜♪」
マルクは淫らな飲酒を初めて経験していた。
そのお酒はいくら飲んでも減らず、彼がおかしいと思って目を開けるとソーニャがボトルの残りを谷間に追加していた。
「ぷはっ!そ、そんなに飲めないよ!」
悪戯がばれたソーニャは子猫のように微笑んだ。
「あ〜ん♪ばれちゃったぁ♪」
「ソーニャってばひど〜い♪」
「あはははは♪」
「ほ〜ら、マルク様♪今度は私のお酒を飲んでください♪」
ソーニャとは異なる赤髪の、こちらも豊かな胸を持つ女性が自分の谷間に酒を注ぐ。
「こ、今度は君も!?」
「そ〜れ、一気♪一気♪」

「マルク様の男気を見せてください～♪」
女性たちが囃し立て、彼は仕方なく次の酒を飲んだ。
それを飲み終えるとまた別の女性がマルクに酒を飲ませ、代わる代わる交代で豊かな胸が彼に押し付けられる。中には胸に自信がない女性もおり、彼女たちはどうしたかというと自らの股間に酒を注いでいた。
「そ、そこはいくらなんでも……」
「だ～め♪マルク様が飲んでくれなきゃ泣いちゃいます～♪」
「早く早く～♪」
胸の控えめな女性たちはソファーに横一列に並んで股間に酒を溜める。
あまりにも卑猥な光景を見たマルクは今まで以上に動揺したが、最後には勢いに流されて彼女たちの酒を飲んでいった。
それから数十分後、マルクは相当な量のお酒を飲んでフラフラになっていた。
「あはははは……みんな、綺麗ですね……」
「きゃ～♪マルク様がフラフラになってる♪」
「可愛い～♪こっち向いて～♪」
「お家に持って帰りた～い♪」
女性たちはきゃっきゃっと沸き立つ。このまま酔わせて近くのホテルに連れ込んでしまおうという思惑が彼女たちすべてにあった。ソーニャがいくら美女でも顔がわからないほど酔わせれば勝ち目があると。
だが、どれだけ酔ってもマルクの目はちらちらとソーニャを見てしまう。自信たっぷりに座って足を組むこの店の女王は同僚たちの接待を観察していたが、しばらくして立ち上がった。そしてマルクに寄りかかると耳元で囁いく。
「ねえ、マルク様♪二人だけのお部屋に行きませんかぁ？」
「ふぇ……？」
「誰にも邪魔されないで一緒に飲みたいんです♪」
蜂蜜のような甘い声でそう囁かれると彼に拒否する選択肢はなかった。
「う、うん！僕も二人で飲みたいです！」
「はぁい♪VIP ルームへ一名様をご案内しま～す♪」
彼女がそう宣言すると敗者たちはがくりと項垂れた。
「あ～あ」
「やっぱりソーニャの一人勝ちじゃん！」
「も～」
同僚たちを尻目にソーニャは千鳥足の彼の手を引き、二階にある VIP ルームへ案内する。そこは今までいた部屋以上に宝石や金銀を使った調度品が並び、床に敷かれた絨毯も超が付く一級品。並の市民なら絨毯を踏むことさえ躊躇する部屋だった。
しかし酔ったマルクはそこに置かれたソファーに腰を下ろすととろんとした目でソーニャを見た。
「うふふ♪かなり飲んでしまったようですね？」
「うん……いろんな子が……飲ませてくれたから……」

「私も飲ませてあげましたよ♪もう一度アレを飲みたいですか？」
「う、うん！」
マルクは彼女の胸の谷間でお酒を飲みたいと正直に言った。
彼女はくすくすと笑ってボトルを手に取ったが、そこでぴたりと手が止まる。
「ど、どうしたの？」
「また同じでは芸がないと思うんです。今度はフルーツを乗せましょう♪」
ソーニャはテーブルに並んだ瑞々しい果物の欠片を胸の谷間に置いてゆき、胸全体を皿のようにしたフルーツ盛り合わせを作った。
「お、おお……」
見たこともない淫らな料理を見たマルクは目を大きく開いた。
「マルク様、今度はお皿から落ちないようにしっかり持って頂けますか？」
「も、持つ？」
「ええ、そうです♪こんな風に♪」
彼女はマルクの両手を握ると自分の突き出るような乳房を触らせた。
「あ……」
マルクの両手に伝わる柔らかな感触。女性の胸を正面から触るという卑猥な行為に両手はぷるぷると震え、それに連れて果物もぐらぐらと落ちそうになる。
「あんっ♪マルク様ったら♪果物が落ちてしまいます♪しっかり持ってください♪」
「し、しっかり……」
「そうです♪がっしりと掴んでください♪」
「が、がっしりと……」
そう言われて彼の手は僅かに握力を増した。
手のひらに収まらない豊かな乳房に指が沈む。沈みながらも反発するゴムのような感触にマルクはハアハアと息を荒げた。
「んんぅっ♪もっと強くです♪」
「はあ……はあ……つ、強く……」
マルクの手は二つの乳房を揉み、彼女は小さな喘ぎを漏らす。
この光景をマルクの仲間たちが見れば頭を抱えただろうが、VIP ルームに彼らを邪魔する者は一人もいなかった。
「さあ、お食べになって♪」
「う、うん！あむっ、はむっ……もぐもぐ……」
マルクは待ちわびたように彼女の胸に顔をうずめ、手で乳房を支えながら果物を食べてゆく。やがてそれらは全てマルクの胃に収まったが、ソーニャの胸は果物の汁でベトベトになっていた。
「あ～ん♪マルク様、私の胸がお汁でびちょびちょです～♪この汁も舌で舐めてくださいますか？」
「な、舐めて……いいの？」

「もちろんです♪この谷間の奥も念入りにぺろぺろしてくださいね♪」
彼女はそう言って重量感のある胸を持ち上げ、彼の眼前に差し出す。
マルクは双丘の魔力に逆らえず、獣のように舌を出して彼女の肌を舐めた。
「ぺろっ……」
「んんっ♪もっとペロペロしていいですよぉ♪」
「ぺろっぺろっ、れろれろっ、れろろっ……」
「はぅぅぅっ♪ちょっとくすぐったいかも♪」
部屋の中にピチャピチャと水音が響き、一人の若い男が美女の胸にしゃぶりつく淫猥な光景がしばらく続いた。胸の谷間を入念に舐め続けた結果、果物の汁はなくなったが代わりに彼の唾液でソーニャの胸はてらてらと濡れ輝いていた。
「ふふふ♪結局、ベトベトなのは変わりませんね♪」
「あの、えっと……」
言葉に詰まるマルクだったが、ソーニャは笑みを浮かべて彼の手を乳房から引き離す。いつまでも触っていたいマルクの顔に名残惜しさがありありと現れていた。
「あ……」
それを見たソーニャはくすくすと笑う。
「では、今度は胸とは別のところでお酒を飲みましょうか♪」
「別のところ……それってひょっとして……」
マルクは彼女の下半身に目が行った。他の女性がしたように股間にお酒を溜めるのだろうか。そう期待する彼に対してソーニャは妖艶に笑うとグラスに注がれたお酒を自分の口から煽った。そしてマルクに顔を寄せ、お互いの唇が接近してゆく。
「え……」
まさかと彼が思ったのもつかの間、ソーニャは唇を押し付けた。
「ちゅうっ……ちゅっ、じゅるっ……じゅるる……」
彼女の口内に溜めたお酒が口移しでマルクに注がれていた。
彼の口内に流れ込むそれは少し経つとゴクゴクと嚥下され、続いて彼女の舌が彼の中に侵入してきた。
「ぺろっ、れろろっ、じゅれろっ、れろろろぉぉぉっ」
彼女は巧みな口遣いでマルクの口内を愛撫していく。
歯、舌、歯茎、そして口の奥にまでウネウネと這い回って舐め尽くし、じゅぽんっと音を立てて唇を離すとマルクの顔は精神魔法を受けたように蕩けていた。
「マルク様、口移しのお酒はいかがですか？」
「さ、最高です……」
「まあ♪そう言ってくれて嬉しいです♪マルク様のアソコもすご〜〜く喜んでますね♪」
「え……ああっ！」

彼はソーニャが彼のズボンに触れることでやっと気付いた。そこはズボンが破れそうなほど膨れ上がり、ソーニャはそれをズボンの上から撫でていた。
「これは……その……」
「ふふふ、恥ずかしがらないでいいんですよ♪ここはそういう気分になってもらうお店なんですから♪」
ソーニャはそう言って優しく彼を慰める。
そして彼が思ってもいない提案をした。
「マルク様、このズボンを脱がしてもよろしいでしょうか？」
「え……ええ！？」
「駄目ですか？凄くきつそうですし、それに……」
彼女は興味津々という目で下半身を見つめた。
「マルク様のアソコがどうなっているか、私、見てみたいです♪」
「いや、それはいくらなんでも……」
いくら酔っていても男の象徴を見せろと言われればマルクはさすがに躊躇する。
しかも完全に起立してしまっている今はなおさらだ。
「私も胸を触らせてあげたんですからマルク様のあそこを見るくらいいいじゃありませんか♪そ～れ♪脱がしちゃえ～♪」
「うわあっ！」
マルクが止める間もなく彼女は膨張した男根を服から引っ張り出した。ビンッとバネが飛び出るように現れた肉棒を見たソーニャは目を丸くする。
「まあっ！こんなに大きいなんて……」
「あ、あぁ……」
パンパンに膨れあがった男根を見られ、マルクは涙目になった。
しかし彼女はすぐに愉悦と好奇心に満ちた顔になり、慈母のように彼を見つめる。
「マルク様ってば可愛いお顔をしてるのにこちらはもう大人なんですね……。私、びっくりしちゃったけど嬉しいです♪」
「う、嬉しい……？」
「はい♪男らしくて素敵なオチンチンですから♪」
彼女はそう言ってマルクの怒張した男根に片手を添えた。
「ううっ！」
「あぁんっ♪マルク様のおちんちんってば火傷しそうなくらいに熱い♪私の胸や口でこんなに興奮してくれたんですね♪」
ソーニャの美しい指は陰茎を優しく撫で、その根元にぶら下がっている二個の陰嚢をもう片方の掌で包み込んだ。
「こっちは柔らかくてコロコロしています♪」
「あ、うぅ……」
文字通り急所を掴まれているマルクは不安と淫らな欲望の混ざった複雑な心理状態だった。
「マルク様、ちょっと寝転んでもらえますか？」
「え？」

「いいから♪いいから♪ほら、私が膝枕をしてあげます♪」

ソーニャはソファーの上に彼を寝かせ、自分の膝の上に頭を乗せる。この体勢だとマルクは彼女の大きな胸を下から眺めることになる。美しい顔が隠れそうなほど張り出た胸を下から眺めるのは今までとは違った興奮があり、彼の男根はびくびくと反応した。

「うふふ♪マルク様もこの体勢が好きみたいですね♪それでは、私のおっぱいをまたマッサージしてください♪」

「ま、また揉んでも……いいんですか？」

「はい♪た～っぷりと揉んでください♪」

彼はソーニャの笑顔をいくらか隠す乳房を下からゆっくりと揉み始めた。

「あぅ……はぅぅん……気持ちいいですよ、マルク様ぁ♪」

ソーニャの口から喘ぎ声が漏れ、彼はその響きを聞きながら横から揉んだ時よりも胸の重さをはっきりと感じていた。そんな状態でいればもちろん彼の露出した肉棒はビクンビクンと揺れ始め、振り子のように動くそれをソーニャは片手でそっと握った。

「あっ……」

「マルク様、おっぱいをマッサージしてくれるお礼に私もマッサージしてあげます♪」「いきますよ～♪し～こし～こし～こ♪」

彼女は片手でマルクの陰茎を握ると前後に擦り始めた。

「あっ！ああっ！うあああっ！」

彼は女性に手淫してもらうなど初めての経験だった。しかも相手は極上の美女で、その乳房を顔に押し付けているのだから興奮しないわけがない。上下にしごかれる男根から背筋を伝って濃厚な快楽が駆け上がり、彼は全身が溶けていくような感覚に襲われてゆく。

「もう少し早い方がいいですか、マルク様ぁ？しこしこしこしこ～♪」

「うわっ！あっ、あうううっ！」

「それとも遅い方がいいですか？し～～こし～～こ♪」

「あ、あぁぁ……」

手のストロークがころころと変わり、マルクはその動きに翻弄された。時には肉棒の角度も変えて刺激を調整し、そのどれもが快楽責めとなってマルクの股間と脳が蕩けた。

「はうっ、あ、あうううっ！」

「まあ♪マルク様のおちんちんからヨダレが出てきました♪喜んでくれてるんですね♪」

彼女はマルクの鈴口からあふれる先走り汁に手ごたえを感じ、生臭いオスの匂いを嗅ぎながら淫らな手の動きを加速させていく。

ニチュッニチュッニチュッ

ズチュッズチュッズチュチュッ

粘っこい音が部屋に響き、やがて肉棒と彼女の手は透明な液体で濡れてベトベトになった。彼の口からは短い喘ぎ声が何度も溢れ、卑猥なプレイを続けながらソーニャはある話題を振った。

「ねえ、マルク様、魔物を倒してもらった賞金は何に使われるのですか？」
「え……し、賞金？」
「はい。一五〇万リルの賞金があの魔物にかかっていましたよね？」
確かにマルクたちは賞金を受け取っていた。それは彼の手元にある。なぜ性器をこすりながらそんな事を聞くのか彼は一瞬気になったが、下半身から這い上がる快感でどうでもよくなった。
「み、皆の武器を……んううっ……し、新調するつもりですッ……あ、あぅぅっ……」
「まあ、やはり戦いを生業にする方はそこに気を遣うんですね。私達もドレスや装飾品がないとお店で戦えませんし。あっ、マルク様の戦いと比べては失礼でした。お許しください♪」
「き、気にしな……あうっ！い……でくだ、さ……ん、んうぅぅっ！」
彼は鈴口から先走り汁をぴゅっぴゅっと散らしながらなんとか受け答えした。
高い技術を伴ったソーニャの手淫はあっという間に彼を限界に追いやった。暴発しそうになった彼は歯を食いしばって耐える。しかし股間の根元に熱く粘っこ白濁液が溜まり続け、それは吹き出る寸前だ。あと数秒で射精する。彼がそう確信した時だった。
「はい、スト～ップ♪」
「え、えええ！？」
陰茎を擦り付けていた手が止まり、マルクは悲鳴を上げた。
「マルク様、ごめんなさい♪お店のサービスはここまでなんです♪」
「そ、そんな……」
「うふふ♪もっと擦ってほしいですかぁ？」
「う、うん……」
マルクは恥も外聞も捨てて手淫の続きをねだった。
それを聞いたソーニャはにやりと笑う。
「では、一〇万リル頂きま～す♪」
「え！？」
「実は冒険者ギルドから通常接待の金額を頂いてるんですけど、ここからは特別コースなんです♪一〇万リル頂けないと続きはできないんですよね～♪」
「一〇万リル……」
安くない金額に彼は悩んだ。それを見たソーニャは自分の衣装に手をかけ、零れそうな乳房と共にゆさゆさと揺らした。
「特別コースならおっぱいも全部見せちゃうし、ちゅうちゅう吸ってもいいんですよ♪」
「は、払います！今すぐに！」
彼は少しも迷わなかった。

※続きは製品版で読めます。